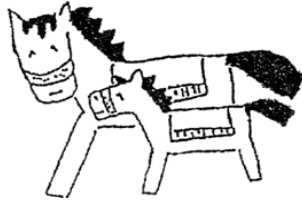


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと



25年 11月 NO. 228

〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		11月の主な活動		～お気軽にどうぞ～
11月 9日	土	体験保育 10:00～12:00	お子様と同じ年齢のクラスに 入って遊びましょう。	
11月 22日	金	おはなしの会 10:00～12:00	「秋を楽しもう」をテーマに折り紙シアターや 大型絵本で楽しみましょう。	
11月 26日	火	健康・育児相談 11:00～12:00	園医師（小児科）にゆっくり 相談できます。（予約要）	
11月 27日	水	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	ヤミ金、サラ金の被害・生活困窮の現状を 「高松あるなろの会」の山地さんから お聞きします。	
11月 30日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も育児体験に おいで下さい。	
11月 30日	土	笑いヨーガ 14:00～16:00	大いに笑って、心と体をほぐし 疲れを吹き飛ばしましょう。	

<p>・火～金の13時～16時までは、園内開放しています ので、親子でご来園下さい。 (但し、月・日曜・祭日は休み)</p>	<p>育児相談（月～土）9:00～18:00 しつけや子育てについての悩み、保育園生活 入園・見学についての相談もどうぞ。</p>
--	--

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



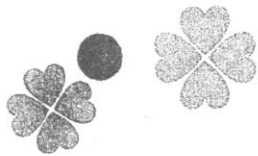
金子みすゞ第二童謡集より

ひるまの次は、夜だってことも、
私が王女でないってことも、
お月さんは手では採れないってことも、
ゆりな
百合の裡へははいれないってことも、
時計の針は右へゆくってことも、
死んだ人たちがいないってことも、
ほんとになんにも決まっていってないから、
よかろうな。
ときどきほんとは夢にみたなら、
よかろうな。

夢がほんとは決まっていってないから、
よかろうな。
夢じゃなんにも決まっていってないから、
よかろうな。

ゆめ うつつ
夢と現





「人は変われる」

作家 寮 美千代



ひよんなことから、奈良少年刑務所で、受刑者の少年たちに、童謡と詩の授業を始めて今年で6年目になる。受講生は強盗・殺人・レイプ・放火・薬物違反などの罪を犯した少年たち。刑務所から選りすぐりの10名を対象に、月に1度、1時間半の授業を半年間行う。

選りすぐりとは、みんなとうまくやっていくのが難しい子、ベスト10だ。そもそも、刑務所に来る子たちは人づきあいが苦手だ。そこからさらに落ちこぼれてしまうような子たちを10人、まとめて面倒を見るのだから、生半可ではない。最初は途方に暮れた。

極端に内気で教官にしがみついたままの子。土塊のように無表情で目の焦点が合わない子。チックと貧乏揺すりの止まらない子。えらそうにふんぞり返っている子。はじめは、みな、とりつく島がないように思われた。

彼らの多くは、虐待やいじめにあっていて、その痛みから、心を固く閉ざしていたのだ。

しかし、みんなで絵本を楽しんだり、詩を書いてもらって、互いに感想を述べあううちに、みるみる様子がかわってきた。こんな詩を書いてきた子がいた。

「くも」 空が青いから白をえらんだのです。

1行だけの詩。空に浮かぶ雲の気持ちを描いた詩で、省略が効いている。これを書いたのは、薬物中毒の後遺症のある子で、ろれつが回らない。この子に、この詩を朗読してもらったのだが、うまくいかない。早口で、うつむいて、しかもろれつが回らないのだから、さっぱりわからない。「もっとゆっくり」「前を向いて」と何度もやり直してもらって、やっとみんなの耳に届くように読めた。みんなが大拍手をした。そのとたん、彼が手を挙げて、こう言った。

「先生、ぼく、話したいことがあるんですが、話してもいいですか」

ふだんは自分からしゃべらない子なので、びっくりして「どうぞ、どうぞ」というと、彼はどもりながら、つかえながらも堰（せき）を切ったように、話しはじめた。

「ぼくのおかあさんは今年で7年忌です。おかあさんは体が弱かった。でも、おとうさんは、おかあさんを殴っていました。ぼくは、小さかったので、守ってあげられなかった。おかあさんは、亡くなる前に言いました。『つらくなったら、空を見てね。わたしはそこにいるから』と。ぼくは、おかあさんのことを思ってこの詩を書きました」

あまりのことに呆然（ぼうぜん）としていると、受講生から、さっと手が挙がった。

「ぼくは、〇くんは、この詩を書いただけで、親孝行やったと思います」

「ぼくは、〇くんのおかあさんは、雲のように白く清らかな人だったんじゃないかと思



ました」

「ぼくは、雲みたいに、ふわふわでやわらかくて、やさしい人だとおもいました」

「ぼくは」「ぼくは」とくちごもった子は、絞り出すように「ぼくは、おかあさんを知りません。でも、この詩を読んだら、ぼくも空を見あげれば、おかあさんに会えるような気がしました」と言い、わっと泣きだしてしまった。みんなが、その子を慰めてあげる姿は、いま思いだしても涙が出そうになる。

「母を知らない」と言ったその子は、自傷行為の絶えない子だったが、この日を境にぴたりと自傷行為が止まり、人とも話ができるようになった。

相手の思いを受けとめる。ただそれだけで、彼らは癒される。心の奥のやさしさが溢（あふ）れだす。ほんとは、みんなやさしいんだ。人は変われるんだ、と、わたしは彼らから教わった。

(新世 NO. 787 より)



「しゃべれない子」



ある大学のゲスト講師に呼ばれた時のことだ。受講生は7名。ゼミのような小さな授業だったのだが、1人だけ、授業に集中できない子がいた。そんな少人数なのに、なんと授業中に携帯を出して、ゲームをしているのだ。

わたしを呼んでくれた教授も、さすがに黙っていられなくて、そっとその子のそばに行って注意をした。その子は、おとなしく携帯をしまったけれど、やっぱり授業に集中できずに、終始ぼんやりと宙を見たりしていた。

授業の最後に、1人ずつ感想を述べてもらった。その子の番になったが、答えられない。反抗的で答えない、というのとは違う。何を言ったらいいのか、わからない、自分の気持ちかわからない。わかっても、言葉が見つからない。声が出ない。発語が困難、というのがありありとわかった。

わたしがその子を見詰め、黙って待った。気まずい沈黙が流れる。沈黙に耐えられなくなった学生が「じゃあ、ぼくが先に」と言ったが、制した。教授も助け船を出そうとしたが、それも制した。「いまは、彼に聞いているのですから」とわたしは言い、またみんなと沈黙に耐えた。

それは饒舌（じょうぜつ）な沈黙だった。苦しんでいる、もがいている、迷っている、がんばっている。彼の額から冷汗が流れる。かわいそうだと思うけれど、彼の順番を飛ばしたりしない。

ひたすら待てば必ず返答があると、わたしは奈良少年刑務所で受刑者に授業をしている

うちに学んだ。その確信がなかったら、とても待てる沈黙ではない。

さんざん苦しんだ挙げ句、彼は言った。短い言葉だったけれど、子ども時代の思い出も交えた、真実の言葉だった。安堵（あんど）の空気が流れた。みんなでいっしょになにか成し遂げたような、ふしぎな一体感が生まれた。

後で聞くと、その学生は、強い虐待にあってきたのだという。同じだ、と思った。受刑者たちと同じだ。強い虐待を受けた子は、話すことが困難になる。なにか言えば殴られるかもしれない、とその恐怖が身に染みてしまい、発語ができなくなるのだ。

あの沈黙は、恐怖の壁を必死で乗り越えようとしているあがきだった。そんな時は、助け船を出しても、その子の順番を飛ばしてもいけない、その方が、一見親切に思えるが、決してそうではない。待つてあげること、責めないで静かに見守ることが、なにより大切だ。

しゃべれない子は、心の扉を閉ざしている。高い壁の向こう側に閉じこもっている。だから、外界に興味が持てない。授業に集中できなくて、ゲームをしてしまうのも、外界のことが自分とは無関係に思えるからだ。世界はいつも磨（す）りガラスの向こうにある。彼の心は、だれもいない荒涼とした空間にいる。その孤独を思うと、そら怖ろしいほどだ。

そんな子は、自分の感情がよくわからない。痛い・悲しい・つらい、を閉めだすために、うれしい・楽しい、も閉めだしてしまった。感情が希薄だから、よけいに言葉は出ない。

そんな子の心を開こうと、無理にこじ開けてはいけない。貝のように、よけいに固く閉ざしてしまうからだ。処方は1つ。ひたすら待つこと。向き合って、静かに、ゆったりと待つてあげることだ。

少年刑務所の授業でもそうだが、待てば、必ず発語してくれる。途方もなく長い時間待ったとしても、一旦発語してくれれば、その次には、発語までの時間が半分になる。その次にはその半分に。そして、いつしかふつうにしゃべれるようになるのだ。確実に。

せわしない世の中、なかなか待てるものではない。けれども、待つことの大切さ、豊かさを、彼らは私に教えてくれた。
(新世 NO. 788 より)

りょう みちこ ● 1955年、東京都生まれ。外務省勤務、コピーライターを経て作家に。1985年に毎日童話新人賞、2005年に『楽園の鳥 カルカッタ幻想曲』（講談社）で泉鏡花文学賞を受賞。2007年より、奈良少年刑務所「社会性涵養（かんよう）プログラム」講師。主な著書に『空が青いから白をえらんだのです 奈良少年刑務所詩集』（長崎出版）など。現在、奈良県在住。